

【ねがいましては】

令和元年12月25日

KYOWA SCHOOL

第350号

「よい子1」

最近手にした一冊の本、『人生の悲劇は「よい子」に始まる』（加藤諦三・PHP文庫）です。かなり強引な口調で、ズバッと言いつけてきます。「・・・なんだ」と、確定ランプを突きつけてきます。ここしばらくはこの強烈な内容をご紹介しますと思います。筆者の加藤諦三さんは、心理学者として有名な方であり、現在も早稲田大学の名誉教授として活躍されています。早速内容へと入ります。

－「よい子」を演じる子どもは、いつも親の愛を失う不安を持っている。愛を失うことを避けるために、彼らはよい子であろうとする。見捨てられたくないから、誰よりも強く、優れていようとするのだ。－

お母さんに叱られたくないから・・・お母さんをおろそかにさせたくないから・・・(同じことがお父さんにもいえます)。それが目的で勉強をしているお子さんは、たくさんいるのではないのでしょうか。たった今これに目を通されている方のお子さんはいかがでしょう・・・。お子さんの日々の反応から推察してみてください。

筆者はさらにこう書いています。－イレーネのエピソードより・・・イレーネは両親にとっては最初の子どもだった。彼女はとくに父親に可愛がられて育った。彼女が5歳の時、弟が生まれた。親の愛情は徐々に弟へと移っていくのをイレーネは感じ取った。そこで、愛情を取り戻すべく彼女は考えた。まず、カンシャクを起こしてみた。全く変化なし。今度は病弱でかわい小さな女の子のように振る舞った。これも効果なし。そこで作戦を変え、今度はよくお手伝いをするよい子になって見せた。すると、これが効果あり。父親が彼女に微笑みかけてくれた。それから彼女の人生の目的は「よい子」を演じることとなった。やがて二十歳になった彼女は、ある男に恋をした。彼女は彼を失いたくないのである行動を取った。それが彼にとっての「よい子」だった。しかし数年後、二人は別れを迎えた。そして数年後、彼女は彼の夢を見た。夢の中で彼女は、彼への怒りでいっぱいになって目が覚めた。その後、彼女はまた新しい男に出会う。そしてまた彼の理想像をめざして「よい子」を演じる。こうして彼女は自分を侮ることで、食べ物にしようとする男たちの格好の餌食になっていった。－

ここで大切なことは、他人を喜ばせようとして、自分を殺しながら生きていくという人生がいかに危険かということです。

子は親のために、必死になって勉強をする。良い成績を取って誉めてもらおうとする。学びから来る深い感動などそっちのけで、ただただ成績のためだけに突っ走る・・・。そして良い成績を修めたときの親の喜ぶ姿を人生の最も大きな喜びとする。ここで疑問になることが、では、勉強は好きでしたか。学びは好きでしたか。という疑問です。

親は子のために、必死になって働く。働いて得た収入を使い、効果の高そうな塾を選び行かせる。ここでいう効果とは、短時間に成績が伸びる塾ということになります。ただただ子の成績向上のためだけに、親は日夜自分を犠牲にしながらかつて働く・・・。そして高額な教育費をかけ、子の成長に全身全霊をかける・・・。そして学校から、塾からの結果を目の当たりにし、呆然とする・・・。「私の苦労はなんだったのか・・・。」

親はひたすら子の「お母さんありがとう」を望んでいた・・・。「のに・・・。」

この中に潜むもの・・・『期待』・・・この期待こそ安定した精神状態をことごとく逆の心理状態へと追いやる「魔物」なのかもしれません。

ではここでまた、子ども側へと立場を戻してみます。

毎日のように必死に働くお母さんを見つめています。その働きによって得た代償の多くが子へ注がれていることも承知しています。子へかかる重圧をご想像ください。口では何も言っていないのですが、かなりのストレスを子へ与えていることが分かります。さらにそんなことそっちのけで、楽観的行動を起こそうものなら、親の感情は爆発寸前へと追いやられるのかもしれません。

日々、「よい子」へならなければ、と、背中へかかる重しを感じながらの生活が続きます。

では、場面を切り替えて、このようなご両親がいたらどうでしょうか。

「〇〇ちゃん、今度の連休を使ってお父さんとお母さんと旅行に行ってきますからね。しっかりお留守番しててね。」子は一瞬呆然とします。しかし、次の瞬間あることに気がつきます。「いつまでたっても私の両親は恋人同士気分なんだから・・・人生楽しんでるなー。私も将来はああいう夫婦でいたいなー。」と。

つまり、子からすれば一瞬寂しい気もしますが、親離れ子離れも時間の問題。人生をこころから満喫しようとなさっているご両親を見ながら、自分の将来像を重ねているほほえましい光景がそこにはあったのです。

実際に、そのような家族を私は拝見したことがあります。ご両親と娘ひとりの3人家族。結構頻繁にご両親は旅行へ行かれるのだそうです。結果、子も自由奔放、のびのびと育ちます。大学は上智大学へ、そして一部上場の大企業へと就職、その後転職し、数年前結婚。昨年、元気な双子さんを授かっています。

子も親も、客観的な目でお互いを敬いながら、距離感持って生活することが大切かもしれませんね。